
空のラブレター

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空のラブレター

【Nコード】

N4387BA

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

少女に追い詰められ転校することになった毛利蘭。

少女の狙いは工藤新一を手に入れること。

少女はどうして新一を好きになったのか？新一に対する思いはなぜか？「あなたは…どうしてこうなったの？」蘭の問いの少女の口は静かに動く…「復讐よ…」彼女の口から出た言葉は何を意味するのか？

「工藤君はあなたのことなんて見てないわ…存在すらないでしょうね…」蘭を守る志保と園子。少女の力は計り知れないものだった。

「自分では何もできないくせして…よくまあ、強がって生きてきたわね…」
「そんなの…あなたも同じじゃない…人は……」
「冷静に話し合う蘭と少女。新一は、蘭を守り抜くことができるのだろうか？」

案じていた夢（前書き）

さあ、新連載始めました！

案じていた夢

「知ってたの…あいつを愛することはできない…って…」

震える声で蘭はある少女を目の前にして言う。

「わかっていたんでしよう？だったら、どうして…？どうして、彼に近づいたの？」

「そんなの…私にはわからない…」

「私はね、工藤君をあなた以上に愛してる。でもねえ、あなたは愛していなかったのに突然愛してしまった…その責任、どうしてくれるの…？」

「あいつの前から消えるから…もう、会えないと思うから…」

「そうね…なら、早く消えてよ…私は…彼を自分のものにするわ…」

「じゅめんね…新…」

チチチチッ、チチチチッ

目覚まし時計の音が私の耳に入ってくる。

あ、起きなきゃ…

むくつと起き上がると急ぎ足で御飯を作りに行くのが日常。

懐かしいなあ…

夢のことを思い出す。

すごく苦しい思いをしたあの日。

「何で今頃…」

私は、そんなことを思いながらお父さんが起きる前に急いでご飯を作る。

私にはもう必要ないはずよ？今は米花町から離れて杯戸のアパートに住んでいるのよ？

新一を愛しちゃったから…こんなことになっちゃったの…

新一は、もう私のことなんて覚えてはいないと思う。

でも、本当のところ会いたくてたまらなかつた。

彼のあの笑顔が見たくて…

彼の顔が見たくて…

でも、それは願うことのない思い。

そうだ…

私がいけないんだからね…

でも、もしかしたら案じていたのかもしれない。

私が見たあの夢は、

これから起こることを案じているのかもしれない。

確かにあの夢は過去の出来事。

中学三年生の時のこと。

だから、関係ないと思う。

でも、案じていたね…

私は…

もう一度新一に会えることと複雑な気持ちでいっぱいになる…

それを案じていたのね…

案じていた夢（後書き）

感想、お待ちしております！！

再会

いつものように杯戸高校の門をくぐる私。

二年間、ずっと私は友達を作らなかった。

いや、誰も一緒にはいてくれなかった。

そりゃ、少しは話すけど、一緒にいてくれる友達はいなかった。

転校生だから…？

それだけ？

でも、私はただ単に友達は作りたくなかった。

あの二人しか私は信用できない。

新一を愛してしまった…だからみんな私のことを無視する。

彼女が言った言葉はすべての人間が言うことを聞く。

でも、あの二人は違う…

自分の意志を持っていた。

自分が思っていることをすべて言った。

私にはないことを持っていた。

だから二人は強かった。

でも、その二人はもういない…

「ねえねえ！今日、三人も転校生がくるみたいよ！」

え…？

三人も？

多すぎじゃない？

「しかも、同じ学校！イケメンだったら私の彼にしちゃお
「私もーっ！」

同じ…学校…

私はその時、変な予感がした…

教室に着くと、私によく話しかけてくれる、山寺さんが近づいてきた。

「毛利さん！今日ね、転校生が来るんだって！」

「知ってる…！三人…って聞いたよ…」

「あ、知ってたの？もうー、そういう情報早いね！」

「そんなことないよ。今さっき知ったばかり。」

「あ、そうなんだ…」

つまらなそうな顔。

私はどうせつまらない女。

「おい、みんな席に着けー！転校生を紹介するぞー！」

先生がみんなに呼び掛ける。

生徒たちは一斉に自分の席へと戻って行くのであった。

気になるな…

その転校生…

「じゃあ、入ってきてくれ！」

先生の合図とともに転校生たちがドアを開けて教室に入ってくる…

私は、その転校生の顔を見て一目で分かった。

「工藤新一と」
「鈴木園子と」
「宮野志保。」
「「「よろしく」「」」

美女と美男。

三人の転校生に女子は黄色い声、男子は気持ち悪い声を出す。

きれい、とか、かつこいい、とかじゃない…

あの三人は帝丹高校からきたんだ…

私の

幼馴染たち…

再会（後書き）

はい！新一、志保、園子の登場です！

これからどんなことになっていくのか…！？

感想待っています！

幼馴染達

え…？

どうして…どうしてあの三人がこの学校に…

私は半ば怖くなってきた。

いまさら三人に顔を合わせることもなんてできない…

私は逃げたんだから…

どんな顔で接すれば…？

私は三人に気づかれぬようにうつむく。

どうせ、ばれてしまうのにもかかわらず、そうしないとどうも気が済まなかった。

「じゃあ、工藤はあその席。宮野はあっち、鈴木はあっち。」
先生がいろんな所を指さしていく。
その指さした先に三人はそれぞれの席へと向かっていた。

お願い…

こっちに来ないで…

でも、新一がこちらにどんどん近付いていく…。

そして、座った場所が私の隣であった。

「…蘭…？」

「…」

何も言いたくない…

どんな顔で答えたらいい？

「蘭…？」

「ごめ…ん…なさい…」

気付いたら泣いていた。

新一に会えたことがうれしいんじゃない…ただ、なぜか泣けてきた…

誰にも気づかれたくない。

でも、新一には見せてしまった涙。

そっと新一の温かい手が私の頬に触れる。

「泣くなよな…」

優しい声が私の心の奥に届く。

懐かしい声。

いつもこういって私を励ましてくれたよね？

「ごめん…ごめ…っ」

涙が止まろうとしない私。

新一は、私の頭をポンポンと叩き、

「謝るな。なんか理由があつたんだろ？」

私が勝手に転校したこと…知ってるんだ…

「ちゃんと見えよ。休み時間に聞いてやっから。」

「う…うん…」

少し落ち着いた私に新一は安心したようににっこり笑う。

白い歯が一段ときれいに見えた。

こんなところにひかれていったんだ…

休み時間になると、私の周りに園子と志保が来てくれた。

「どうしてこの学校にいるのよ!?!」
と園子に何度も言われた。

「そ、それは…」

言えるわけない。

彼女に言われてここに来たなんて…

「あのさ、話の途中なんだけど、毛利さんとはどんな関係なの?」

途中に山寺さんが三人に質問をする。

「ああ、私たちは蘭の親友よ。」

「は?」

「そして、新一君は蘭の恋人。」

「はあ?!」

「そ、園子!そんなんじゃないわよ…!私は責任をとるために転校したん…!?!」

気付いた時には遅かった。

口走ってしまった…

「蘭…責任って…」

「つまり、誰かによって無理やり転校させられたっていついかならぬ？」

「…」

「蘭、誰だ？誰がそんなこと言ったんだ！？」

三人が言うことも仕方ない…

でも、言えないよ…

「言いなさい！」

志保のきつい一言で私はとつとついつてしまった。

「中原さん…」

「え？」

「中原瓊萎さんよ…！」

そう、中原さんだ…

彼女に言われて転校した…

彼女が新一のことが好きって…私は彼女に勝てないと思ってた…

そう、幼馴染だから小さいころから好きだった。

それを隠していた。

それは私が悪い…

彼女にこの恋を上げるしかない…

だから責任を取れって言われてすぐに転校した…。

私は…三人にすべてをはなした…。

あの二年前のことを…

幼馴染達（後書き）

次は蘭ちゃんの過去編です！
感想待ってます！

過去〜日常〜

「ちよつと、新一起きてよ！」

私は毎日新一の家に行つて新一を起こして新一用の朝ご飯を作る。

新一は私の料理をおいしそうに食べてくれる。

それがとてもうれしかった。

小さいころからの満面な笑顔を私に向けてくれることがとても嬉しかった。

その笑顔が大好きで大好きでしかたなかった。

学校に行くときもどこかへ行くときも、いつもいつも私は新一の隣を歩いていた。

私にとってそれは一番いい場所であった。

「ねえ、新一、今日の夕ご飯何がいい？」

「あー…うん…蘭は今日うちで食べるのか？」

「え…いいの？」

「ああ、面倒だろ？いちいち通うの。」

「あら、結構優しいじゃない…？」

「わりーかよ。」

「べつに！。それで？何がいいわけ？」

「蘭のお好み。」

「んじゃーね…新一の好きなものと言えば…ハンバーグ…かな？」

「ん！それがいい！」

子供みたいにはしゃぐ彼が好き。

「じゃあ、ハンバーグね。」

「よっしゃあ！」
嬉しそうに言う彼が好き。

そう私は新一の何もかもを愛してしまった。
大好きで大好きで…

そう、あのときだって…

「…っ!?!?」

私が携帯電話を落とした時。

「蘭?」

一番最初にわかってくれたのが新一だった。

新一が私の携帯電話を覗き込むと、お父さんの声が聞こえていたらしい。

『毛利さん！？毛利さん！？』

「あの一、どちら？」

『米花総合病院の者です！あなたは？』

「毛利小五郎の知り合いですか…」

『えつと…実は先ほど毛利小五郎さんが車にはねられてしまったんです…！それで、娘さんに来ていただこうと思ひまして…』

「車に…！？わかりました！すぐに行きます！」

『はい！』

新一は私を押さえながらも先生にすべてを伝え、病院へと向かっていった。

新一も一緒にいてくれた。

たくさんたくさん励まされた。

そして、お父さんは一命を取り留め、今ではすっかり元気である！
なにもかも、新一のおかげ。

そうやって私は幸せな日常で暮らしていた。

彼女が来るまでは…

過去々日常々（後書き）

さあ、次回、彼女が転校生として…!!

感想待っています！

過去〱彼女〱

「えー、今日からこのクラスにはいる、中原瓊菱さんだ。」
先生の紹介に男子が騒ぐ。

美人…！

私も思う。

男子が騒ぐの無理はない。

「新一、彼女、可愛いよね！」

私が隣にいる新一に耳打ちする。

新一はブツとした顔で

「そーかあ？俺にはかわいごぶりっこにしか思えねーけど…」

「新一って変ね。」

「うるせー。」

でも、内心ホツとしてたりする。

彼女のが好きだったらどうしようって考えてた。

だって、彼女に勝てるわけじゃないじゃない。

かわいいし…

そうして、ホームルームが終わって授業へと時間は進んでいった。

彼女の席は私の後ろ。

彼女が私によく質問してきたの。

「ねえ、あなたの隣にいる人ってカッコいいわね！」

「え…？ 新一が？」

「へへ、呼び捨てなの？」

「うん。幼馴染だからね…」

「へえ…」

一瞬だけ、彼女の眼が光ったような気がした。

なぜか私は背筋が凍るような気持ちを味わった。

なぜだろう？

授業は終わり、休み時間になると、私は彼女にいろいろと質問をした。

「私、毛利蘭っていうの！よろしくね！」

「よろしくね。」

「中原さんってどこから来たの？」

「大阪よ。」

「え？大阪？でも、関西弁じゃあ……」

「大阪っていつても、東京から大阪に行ってまた東京に戻ってきたの。」

「どこの高校？」

「改方学園。」

「え！？改方！？」

「何？誰か知ってる人がいるの？」

「ええ！遠山和葉ちゃんと服部平次君！」

「ああ、彼女たちなら知ってる。服部さんって結構な有名人なんですってね。」

「服部君は高校生探偵だからね。」

「あら、あなた、服部さんのことをよく御存じなのね。」

「新一とよく一緒にいるもの！」

「ふん……」

「中原さんって好きな人いないの？」

「いるわ。」

「え？！誰誰！？」

「秘密にきまつてるじゃない。」

そっけない返事が案じていたのかも……

彼女は悪だった。

完全な悪だった…

過去〱彼女〱（後書き）

はい、ちょっとここで区切らせていただきます!!

過去を離れる

それから彼女が来て一週間が過ぎた。

彼女は親しみやすく、みんなに人気であった。

「なあ、蘭。今日のご飯は？」

「ああ、カレーだよ！」

「ラッキー！」

「ただし、サラダもきちんと食べてね。レーズンも入ってるから。」

「は？」

「うそ。レーズンなんていれません！」

「びつくりしたぜ……」

ホッと胸をなでおろす新一。

かわいいんだから……

「ねえ、毛利さん。ちょっと……」

「中原さん？」

そう、この時だった…

「あなた、工藤君のことが好きなんでしょう？」

「え！？あ…いや…」

「私は工藤君が好きよ？愛してる。」

「…」

「私はあなたのように平凡な人じゃないわ。あなたのようなバカみたいなのへらへらしている人じゃないわ。」

「中原…さん？」

「私はねえ、あなたみたいな人が一番嫌い！ばっかみたいであほらしい。」

「…中原さん…」

「とつとつ私の前から消えて！」

「そんなの…」

「あ、そう。なら、あなたのお父さんがどうなってもいいんだ。」

「え…？」

「私の家のお金をつけば穴のお父さんを暗殺することもできるのよ？」

「今までのきれいな声はどこへ行ってしまったのだろうか？」

私は何も考えられない状態で立ち止まっていた。

お父さんを助けるには…私が…いなくなれば…

「知ってたの…あいつを愛することはできない…って…」

震える声…自分でもわかった。

「わかっていたんでしよう？だったら、どうして…？どうして、彼に近づいたの？」

「そんなの…私にはわからない…」

「私はね、工藤君をあなた以上に愛してる。でもねえ、あなたは愛していなかったのに突然愛してしまった…その責任、どうしてくれるの…？」

「あいつの前から消えるから…もう、会えないと思うから…」

「そうね…なら、早く消えてよ…私は…彼を自分のものにするわ…」

「ごめんね…新…」

私はその後、帝丹高校を後にした…

過去を離れる (後書き)

これが蘭の過去でした。

かわいそうな蘭…これから平和な日常が続きます!!

感想待っています!

平和な日常〜元の自分〜

私が過去をすべて話すと三人は「中原さん…最低…」と言ってくれた。

「中原さん、今も帝丹高校で人気者よ。」

志保は嫌味つたらしく言う。

「中原は…つまり俺のことが好きで…蘭に攻撃したってことだな…」

「ごめんね…黙ってて…」

「いいのよ、蘭は今までずっとくつらかったのね…」

「ほんと…ごめん…」

謝ったら泣けてきた…

馬鹿…迷惑じゃない…

泣いたら…みんなに迷惑かけちゃうじゃない…

でも、涙は止まろうしなかった。

「蘭…」

「すぐくつらかったのね…」

「辛かったら泣いてもいいんだぜ？」

優しい言葉をかけてくれる三人。

私は三人の中で泣いた。

暖かい中で泣いていた…。

私が落ち着くと、三人はほっとしたように「窓際に行こう。」といった。

一月の冬の風は私たちを冷やす。

窓から見える、冷たそうな青い空はどこまでも果てしなく続いている。

「蘭、中原さんにはもう会わないほうがいいみたいね。」

「ええ、その代り私たちがきちんと彼女に行ったほうがいいみたいよ、工藤君。」

「ああ。」

心強い三人。

何もできない私。

私は、ここにいて本当に幸せだった。

というより、私はもしかしたら何もできない。だから人に頼ってばかり…ということになる…

「蘭、お前は人にばっか頼ってねーよ…」

え…？

小声で私に耳打ちする新一。

え…？

思っていることが分かった？

「ど、どじつて…」

「おめーの考えてると」ろくぐらいわかるよ…」

「新一…」

「おめーはつえーよ。たった一人でここまで我慢してきたんだからな……」

「ごめん……」

「あ、謝んなよ……！それに、人に頼ったっていいんだぜ？どうしようもないときはな……」

「……ありがとう……っでさ……新一もうわかったよね……？」

「え？」

「わ、私が新一のこと好きなの……」

「あ……」

「へ、返事……」

顔を真っ赤にして言う私。

自分でもわかってた……

なんて……答えるの……？

きつと「ごめん……」とか言うのかな？

「うぬぬ…」

え…？

せ…せ…せ…

「ごめんな…苦しい思いまでさせていわせちゃまったって感じたよな…」

え…？え…？

「それに…俺のほうから言えなくて…」

え…？

どういふこと…？

「俺も好きなのに、蘭のほうからいって…カッコわりーよな？」

…!?

「し、新…」

「付き合ってください…」

「…はい!」

二人で真っ赤になってちょっと恥ずかしいかも…

「二人とも、何ラブラブやってんのよ。」

いきなり割り込む園子。

「え?」

「もう、みんな科学室に行っちゃったよ?」

「ええええええ!…!」

「チャイムになるまで、あと一分・・・走らないと遅れるわよ?」

「は、走るぞー！ー！」

私たちは一生懸命走って科学室についた。

何とか間に合ったけど、ついたときにはすでにチャイムはなっていた。

先生には気づけなかったけどね…

平和な日常〜元の自分〜（後書き）

はい！

平和な日常でしたね…！

とうとう恋人になつてしまった二人。

本題はもっと先です…><

続く平和な日常でしたあ！

感想待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4387ba/>

空のラブレター

2012年1月14日10時49分発行